

| 村 長 | 副村長 | 課 長 | 係 長 | 課 員 | 担 当 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|     |     |     |     |     |     |

## 報 告 書

項 目 剣ヶ峯地区 「みらいトーク！」 実施報告書

日 時 令和 8 年 7 月 28 日（火）18 時 30 分～20 時 00 分

場 所 剣ヶ峯集会所（裏磐梯合同庁舎）

事 務 局 総務企画課長、企画係長、穴戸、大内、佐藤（路）

出 席 者 3 名

### 1 目的

令和 9 年度から始まる第 6 次総合振興計画の策定に向け、剣ヶ峯地区の現状や将来への不安、残したいもの、10 年後に向けて必要な取組等について意見を聴取するため、剣ヶ峯地区「みらいトーク！」を実施した。

### 2 実施概要

はじめに、村から第 6 次総合振興計画の策定趣旨や計画骨子の考え方について説明した。その後、参加者及び村職員が自己紹介を行い、地区との関わりや日頃感じていることを共有した。

意見交換では、剣ヶ峯地区のビジョンマップを活用しながら、残したいもの、大切にしたいもの、心配なこと、今後あったらよいものなどについて話し合った。また、付箋を用いて意見を出し合い、地図上の場所や地区全体の課題・希望と結び付けながら整理した。

### 3 主な意見

（1）人口や規模だけで測らない地域の豊かさ

参加者からは、人口減少を過度に悲観し、人口や施設の規模を増やすことだけを目標とするのではなく、現在暮らしている一人ひとりの心や生活を大切にすべきとの意見が出された。

人の増減は自然や社会の大きな流れの中で生じるものであり、人口が減ることを直ちに地域の失敗と考える必要はないのではないかとの考えも示された。

地域づくりでは、行政組織や地域の規模を維持することだけでなく、住民が穏やかに暮らし、地域を好きでいられることや、互いを思いやる心を育てることが重要である。

また、他の自治体や地区と比較して優劣をつけるのではなく、現在ある自然、住民、暮らしを大切に、北塩原村や剣ヶ峯地区ならではの価値を高める必要があるとの意見があった。

人口や観光客数等の数字は必要である一方、それだけでは表せない、心の豊かさや地域への愛着も、計画の重要な判断基準とすることが求められている。

## **（２）地区ごとの違いを認め、互いに尊重する関係**

北塩原村は、北山・大塩方面と桧原・裏磐梯方面で、歴史、生活圏、主な産業、地域に求めるものが異なる。

裏磐梯地区には、自然環境そのものに価値を感じ、自らこの地域を選んで暮らしている住民が多い。一方、北山・大塩方面では、農業を続け、生活基盤を築いてきた住民の長年の努力がある。

地区間の違いを対立の理由とするのではなく、それぞれの地域が果たしてきた役割や苦勞を知り、互いを尊重する必要があるとの意見が出された。

観光を担う地区と農業を担う地区を分断して考えるのではなく、裏磐梯を訪れた人に村内の農産物や食を届けるなど、それぞれの強みを生かして村全体で支え合うことが重要である。

すべての地区へ同じ施策を行うのではなく、地区ごとの背景や価値観を踏まえた役割分担と連携の在り方を、総合振興計画の中でも示す必要がある。

## **（３）顔を合わせ、相手を持つことのできる対話**

インターネットや SNS で情報を得られる時代であっても、実際に顔を合わせ、その人の背景や考え方を知る時

間が重要であるとの意見が出された。

高齢者と若い世代、移住者と地元出身者では、受けてきた教育、働き方、地域活動に対する考え方、言葉の使い方等が異なる。

発言の強さや表現だけで相手を判断せず、なぜそのように考えるのかを聞き、すぐに言葉が出ない人を急かさず待つ姿勢も、地域の大切な豊かさであるとの話があった。

以前は、子どもを通じた保護者同士の集まりや、近所でのお茶飲み等により、世代を越えた交流が行われていた。しかし、子どもの減少、コロナ禍、呼び掛ける人の不在等により、こうした機会は少なくなっている。

特別な目的や結論を求めず、高齢者、若者、移住者等が気軽に集まり、お茶を飲みながら話せる場所や機会をつくる必要がある。

#### **（４）住民主体の緩やかなつながり**

行政が新たな交流施設を一から整備するだけでなく、住民が自ら始めた小さな場所や活動を把握し、情報発信、関係者との調整、利用できる制度の案内等によって支える必要がある。

地域の人が集まる場は、常に明確な成果や事業を生み出す必要はなく、日常的に顔を合わせ、関係をつくること自体に価値がある。

#### **（５）歳の神、消防団等が持つ本来の機能**

歳の神等の地域行事は、普段地域活動に参加する機会が少ない住民も顔を出し、地域とのつながりを確認する場となっている。

特定の信仰や従来形式を守ることだけでなく、自分たちが暮らす土地への感謝や、住民が顔を合わせる機会としての機能を残すことが重要である。

消防団については、仕事や商売の都合により平日の訓練へ参加しにくい住民がいる一方、実際の火災時にはポンプ車や機材を扱うことのできる経験豊富な団員がいることが共有された。

訓練への出席回数だけで活動を評価せず、実際の現場で必要となる技能や経験を見る必要がある。また、第一線で消火活動を行う人だけでなく、車両の運転、誘導、連絡、経験の伝承等、それぞれが担える役割を

認めることが重要である。

操法等の訓練が持つ規律や団結の意義を認めつつ、山間部での火災や長距離送水など、地域の実情に合った実践的な訓練を取り入れる必要があるとの意見も出された。

人口や働き方が変わる中では、祭り、消防団、行政区等について、従来の形式をそのまま守るのではなく、その活動が本来残すべき機能を確認し、方法を見直す必要がある。

## **（６）湖沼へのアクセスと利用ルールの整理**

剣ヶ峯地区には、五色沼周辺、小野川湖等の豊かな自然がある一方で、観光客や地域外の人にとって、入口、駐車場所、歩行経路、利用可能な範囲が分かりにくい場所があるとの意見が出された。

湖や沼が道路や駐車場から近い場所にあっても、その存在や入口が十分知られておらず、観光客がそのまま通過してしまっている。

また、土地の所有関係や利用上のルールが明確でないため、来訪者、土地所有者、事業者等の間で行き違いが生じ、地域住民も利用しにくいと感じる場所があることが共有された。

個人間の問題として放置するのではなく、駐車場所、入口、歩行経路、利用できる範囲、マナー等を関係者間で整理し、分かりやすく示す必要がある。

小規模な駐車・休憩場所、案内表示、飲食・物販等があれば、通過する人が地区内に立ち寄り、湖沼や地域を楽しむきっかけになるのではないかと案も出された。

住民、土地所有者、事業者、村、環境省等が話し合い、安全で分かりやすく、地域にも過度な負担をかけない利用方法をつくることが求められている。

## **（７）冬の自然景観を安全に楽しめる仕組み**

冬の五色沼周辺や磐梯山の景観は、夏とは異なる大きな魅力を持っている。

一方で、積雪、屋根からの落雪、除雪、安全管理等の問題から、冬季に立入りや利用が制限されている場所がある。

安全上の理由は理解できるものの、絶好の写真撮影場所が一律に利用できなくなることで、冬季の重要な

観光資源を生かせていないのではないかとの意見があった。

すべての場所を常時開放するのではなく、安全に景色を楽しめる場所や期間を設定すること、歩行範囲や撮影地点を明確にすること、必要に応じて案内人を伴うことなど、管理可能な利用方法を検討する必要がある。

#### **（８）自然保全、景観、交通安全を両立する樹木管理**

道路や湖畔の木々が成長し、湖や山が見えにくくなっているほか、枝が道路へ張り出し、大型バス等の通行に影響している場所がある。

雨や雪の重みで枝が垂れ下がったり、大きな枝が落下したりする危険もあり、観光だけでなく交通安全の面から対応が必要である。

一方で、木を植え、長年育ててきた人もいるため、景観のために一律に伐採すればよいという問題ではないとの意見もあった。

自然を守ること、住民や観光客の安全を確保すること、湖や山を見える状態にすることのバランスを取りながら、伐採、間伐、更新等の方針を地域で話し合う必要がある。

国立公園内であるため、村や住民だけで判断できない事項も多い。環境省等の関係機関と地域が、自然の保全と利用について継続的に協議することが重要である。

#### **（９）環境省等の関係機関と地域との距離**

剣ヶ峯地区では、国立公園の管理や自然環境の整備に環境省等が深く関わっている。

国等が進める整備についても、一部の関係者には説明されていても、地区全体には情報が届いていないと感じる場合がある。

村には、住民、事業者、土地所有者と環境省等との間に入り、情報と意見をつなぎ、自然の保全と利用に関する合意形成を支える役割が求められている。

#### **（10）住民が参加できる観光イベント**

サイクルイベント等が剣ヶ峯地区を通過しているにもかかわらず、住民に開催日や内容が十分伝わらず、地域がイベントに参加している実感が薄いとの意見があった。

沿道の住民に応援用の旗を配り、事前に開催日時を知らせることで、住民が外へ出て参加者を応援できるのではないかと具体的な提案が出された。

オリンピックで村出身選手を応援した際には、普段地域行事へ参加しない住民も集まり、一体感が生まれたとの話があった。

イベントを観光客や参加者だけのものとせず、住民が応援、案内、交流、出店等を通じて関われるようにする必要がある。

住民にとっても楽しく、参加者にとっても地域から歓迎されていると感じられるイベントにすることが、村民の幸福や地域への誇りにもつながる。

防災行政無線、広報、SNS、地区への直接連絡等を活用し、日時、通過場所、参加方法等を事前に確実に伝えることが重要である。

#### (11) 一人ひとりのおもてなしによるファンづくり

観光客が地域で最初や最後に出会った人、困った時に声を掛けた住民の対応によって、その地域全体の印象が変わるとの意見が出された。

道に迷っていた来訪者へ声を掛け、車で案内したことをきっかけに、その人が地域を気に入り、その後もつながりが続いた事例が紹介された。

大規模な広告や施設だけでなく、困っている人に声を掛けること、道を丁寧に案内すること、笑顔で迎えることが、地域のファンやリピーターを増やすことにつながる。

住民や事業者は、観光客と地域との接点となる重要な存在である。自分の一言や行動が村の印象をつくることを共有し、地域で仕事や商売を続けることへの誇りを持てるようにする必要がある。

住民自身が地域を好きであり、地域を紹介したいと思う気持ちは、子どもや来訪者にも伝わり、地域への愛着や再訪につながる。

#### (12) 小規模な商いと新しい挑戦への支援

若い世代は、SNS等を活用して自分や商品を発信し、個人でも集客やブランドづくりを行っている。こうした新

しい事業の進め方を、地域の仕事づくりに生かす必要があるとの意見が出された。

剣ヶ峯地区には多くの観光客が行き来する一方で、地区内で立ち止まり、飲食や買い物をする場所は限られている。

湖沼等への入口や駐車場所を分かりやすくしたうえで、小規模な飲食、休憩、物販、案内等があれば、観光客が地区内で過ごし、地域に消費を生む可能性がある。

一方で、常設店舗は、平日や悪天候時の利用が少なく、経営を続けることが難しいとの実体験も共有された。

新しい施設を建てることを前提とせず、自宅や既存施設を活用すること、季節営業とすること、複数の仕事を組み合わせることなど、固定費を抑えた無理のない方法を検討する必要がある。

地域資源を生かして商売や活動を始めたい若者、移住者、住民に対し、物件、許認可、資金、情報発信、地域との調整等を一体的に支援することが求められている。

### **(13) 行政任せにしない住民と、伴走する行政**

参加者からは、地域の課題をすべて国、県、村、時代のせいにしていても、自分自身や地域の幸せにはつながらないとの意見があった。

まずは自分たちにできることを考え、実際に行動したうえで、個人や地域だけでは解決できないことについて行政へ相談し、力を借りることが理想であるとの考えが示された。

一方で、小さな地域では、新しいことを始めると周囲から注目されたり、批判を受けたりすることへの不安から、行動をためらう場合がある。

地域で挑戦する人を最初から否定せず、まずは話を聞き、地域として応援できる範囲を考えることが重要である。

また、何かを始めようとしても、どこへ相談すればよいか分からない場合がある。ビジネス、地域活動、福祉等について、気軽に相談でき、実現方法を一緒に考える関係や窓口が必要である。

行政と住民を、要望する側と対応する側だけに分けるのではなく、それぞれができることを持ち寄り、行政が制

度や関係機関へつなぐ伴走者となることが求められている。

#### (14) 女性、若者、移住者等の声を直接拾う対話

行政区の総会等では、世帯単位で代表者が参加する形が中心となりやすく、女性や若い世代の意見が表に出にくかったとの意見があった。

裏磐梯地区では、宿泊業等を夫婦で経営している世帯もあり、夫婦で集会へ参加する場合もある。一方で、「一家から一人でよい」「女性はあまり口を出さない」といった従来の意識を感じる場面もあるとの話があった。

世帯の代表者だけでなく、女性、若者、移住者、子育て世代等が、それぞれの立場から直接意見を出せる場を設ける必要がある。

子ども連れや夫婦でも参加しやすく、役職や立場にかかわらず発言できる雰囲気をつくることが重要である。

また、発言が得意な人だけで話を進めるのではなく、すぐには言葉にできない人を待ち、発言の背景まで丁寧に聞く姿勢が求められている。

行政区や役職者を通じて要望を出す方法だけでなく、住民と行政が直接話せる開かれた対話を継続する必要がある。

## 4 総合振興計画への反映に向けた視点

- ・人口や施設の規模だけでなく、一人ひとりの心と暮らしの豊かさを重視する地域づくり
- ・他地域との比較ではなく、現在ある自然、人、暮らしの価値を高める計画づくり
- ・地区ごとの歴史、産業、生活の違いを認めた役割分担と村内連携
- ・高齢者、若者、移住者等が顔を合わせ、互いを理解する対話の継続
- ・住民が話し始めるまで待ち、声になりにくい意見を拾う対話手法
- ・歳の神等が持つ地域交流や土地への感謝の機能の継承
- ・消防団員の技能、経験、事情を多面的に評価する仕組み
- ・消防団の訓練内容を地域の実情や災害対応に合わせて見直す取組

- ・湖沼への入口、駐車場所、歩行経路、利用ルールの明確化
- ・土地所有者、事業者、村、環境省等による自然利用の合意形成
- ・安全を確保した冬季の自然景観の活用
- ・交通安全、景観、自然保全を両立する樹木管理
- ・サイクルイベント等への住民参加と事前の情報提供
- ・住民一人ひとりのおもてなしを地域のファンづくりにつなげる取組
- ・観光客数だけでなく、交流、滞在、消費、再訪を重視した観光施策
- ・自宅や既存施設を活用した小規模な飲食、物販、案内等への支援
- ・SNS 等を活用する若い起業者や移住者への伴走支援
- ・地域で新しいことに挑戦する人を応援する環境づくり
- ・住民と行政がそれぞれのできることを持ち寄る協働の仕組み
- ・ビジネス、地域活動、福祉等を気軽に相談できる関係・窓口づくり
- ・女性、若者、移住者、子育て世代等が直接意見を出せる場づくり

## 5 まとめ

今回の対話では、剣ヶ峯地区には、五色沼周辺、小野川湖、磐梯山、森林等の豊かな自然と、多くの観光客が行き交う環境があることが確認された。

一方で、湖沼への入口や駐車場所が分かりにくいこと、土地の所有関係や利用ルールが整理されていないこと、冬季に魅力的な場所を安全に利用しにくいこと、樹木の成長が交通安全や景観に影響していることなど、自然を守りながら活用するための課題も共有された。

剣ヶ峯地区の対話で特徴的だったのは、人口や施設の規模を増やすことだけを未来と捉えず、現在暮らす一人ひとりの心や、地域を好きでいられる暮らしを大切にすべきとの考えであった。

他の自治体や地区との比較によって地域の価値を判断するのではなく、現在ある自然、人、暮らしを大切に

し、北塩原村ならではの豊かさを育てることが求められている。

また、地域の魅力は自然だけではない。テーマを設けず人が集まれる場所をつくる住民、歳の神や消防団を支える住民、新しい発信方法を持つ若い世代、地域を選んで移住した人、観光客を親身に案内する事業者等、多様な人材が剣ヶ峯地区の重要な資源である。

観光についても、外部へ情報を発信して来訪者を増やすだけでなく、住民がイベントを応援し、困っている観光客へ声を掛け、小さな商いや活動に参加することで、住民自身の楽しさや誇りにつなげることが重要である。

住民自身が地域を好きであり、その思いを言葉や行動で伝えることが、子どもや来訪者にも伝わり、地域への愛着や再訪につながる。

今後は、すべてを行政へ任せるのでも、住民の善意だけへ委ねるのでもなく、住民ができることに取り組み、行政が制度、専門機関、環境省、土地所有者、事業者等との調整を担う関係が必要である。

その基盤となるのは、世代、性別、出身、役職等にかかわらず、互いの背景や強みを尊重し、顔を合わせて話すことである。

住民、事業者、行政、関係機関がそれぞれのできることを持ち寄り、急いで結論を出すだけでなく、人の声を待ちながら対話を続け、剣ヶ峯地区の自然、暮らし、人のつながりを次の世代へ引き継ぐことが重要である。

以上